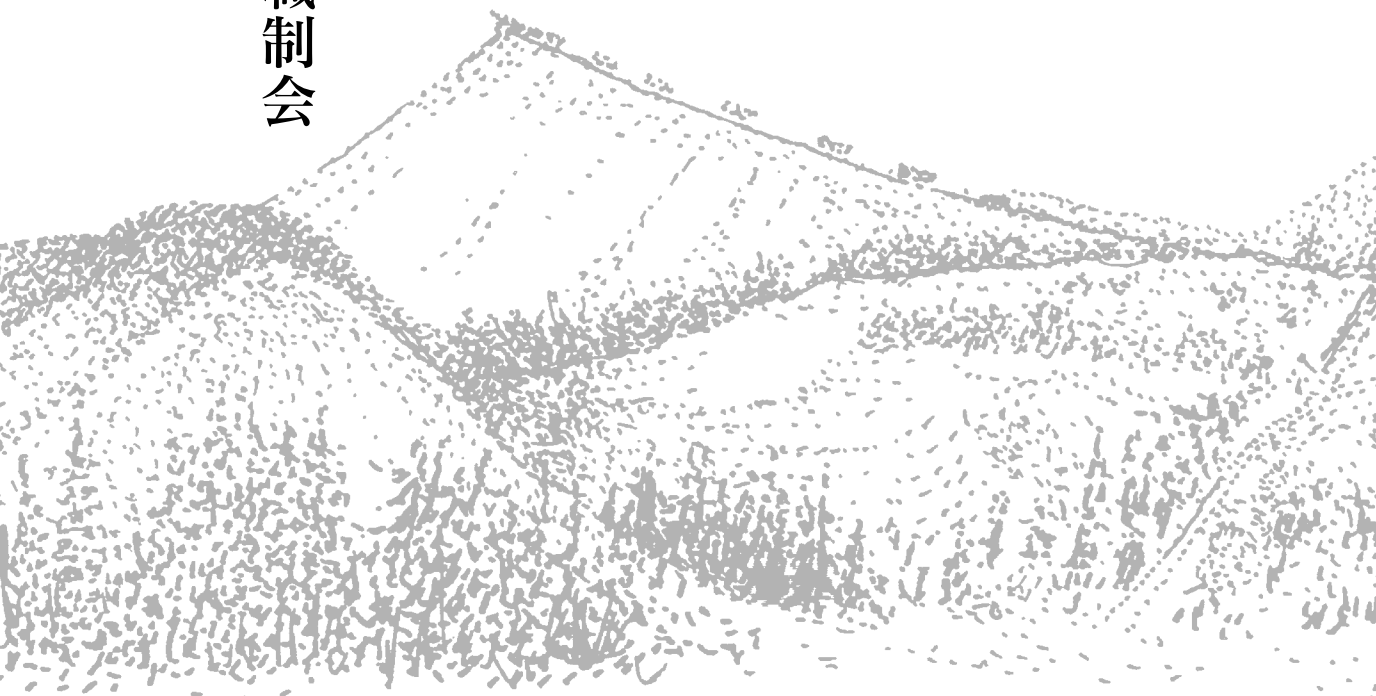


# 炭<sup>や</sup>砒<sup>ま</sup>の思い出

旧西部炭砒採炭課職制会



炭<sup>や</sup>砧<sup>ま</sup>  
の  
思  
い  
出

## 目次

|                               |       |    |
|-------------------------------|-------|----|
| 発行のことば                        | 佐久間宏殷 | 4  |
| 寄稿『閉山―温泉を絶やすまいと灼熱の中で闘った人々の記録』 | 小林 眞一 | 5  |
| 寄稿 私にとつての炭砒                   | 鞍田 東  | 8  |
| 西部炭砒概譜                        |       | 10 |
| 西部炭業所退山式より                    |       | 11 |
| 作品 書                          | 園部 和夫 | 12 |
| 作品 書・水墨                       | 中田 孝  | 13 |
| 守り抜いた「いわき湯本温泉」                | 佐久間宏殷 | 14 |
| 西部への道                         | 高木 晋一 | 16 |
| 黒ダイヤと過ごした私の（恵まれた）人生           | 熱田 清  | 18 |
| 回顧しながら                        | 及川義一郎 | 19 |
| 第一目目の出来事                      | 徳山 弘  | 21 |
| 常磐炭砒の思い出                      | 高橋英三郎 | 23 |
| 思い出の西部炭砒                      | 藤林 雄一 | 24 |
| 悩まされた「自然発火」                   | 佐久間宏殷 | 28 |
| 石炭とのふれあい                      | 阿部 敏雄 | 33 |

|           |       |       |    |
|-----------|-------|-------|----|
| 私の半世記     | ..... | 永山 茂  | 35 |
| 保安大学      | ..... | 石嶋 一二 | 36 |
| 炭砒在職中の思い出 | ..... | 佐伯 勇  | 38 |
| 入社から閉山まで  | ..... | 村田 一二 | 39 |
| 炭砒閉山      | ..... | 安斎 孝道 | 40 |
| 炭砒の思い出    | ..... | 小針 重徳 | 42 |
| 坑夫の歌      | ..... | 結城 良一 | 43 |
| 炭砒の思い出    | ..... | 服部 勝  | 48 |
| 炭砒余録      | ..... | 佐久間宏殷 | 49 |
| 私と炭砒      | ..... | 鈴木 茂富 | 52 |
| スナップ「集い」  | ..... | ..... | 58 |
| 会員名簿      | ..... | ..... | 59 |

写真提供 草野日出雄

## 発刊のことば

私達会員は、本州最後のヤマ昭和四十六年五月西部炭砒(株)発足時より昭和五十一年十月常磐炭砒(株)西部炭業所閉山の期間に、採炭課職制に所属した人達です。

今回、発刊の主旨として、第一線現場にて悪条件下全力を盡くした皆さんの思いを、少しでも印象が強く、手の動きがあるうちに、ヤマに生きた「あかし」を綴り、心の糧にと、お願いしました。

投稿し安堵したという方も居りましたが、閉山二十七年たち身体の不調により、又危険な目に遭い、思い出したくないとの、断り状もありました。然し上司二名、会員十九名の夫々の貴重な作品、寄稿がありました。

大半の方は、在職中日報は書いたが文章を書いた事のない人達であります。編集委員も初めての経験です。満足な成果はあげられませんでした。ただ炭砒の思いは夫々人一倍のものです。以上により意とする所を汲みとっていただき発刊の運びにしました。

会員皆さまの健康祈願、疎遠解消、心の財産となることを期し、発刊の言葉と致します。

佐久間 宏 殷

# 『閉山——温泉を絶やすまいと

## 灼熱の中で闘った人々の記録』

小林 眞 一

『あの日、あの時、あれから二十年 常磐炭硯閉山ドキュメント』渡辺一男氏出展の写真展（平成元年六月二十九日～七月三日）を見て、一体この時自分はどのようにして居ったろうと、当時に憶いをはせました。多くの従業員が閉山闘争に明け暮れる中で、仲間と共に坑内の保安確保に東奔西走して居った事を思い起こす。従って坑外での本当の叫びは聞かずじまいだった。

改めて写真の中の仲間を見、そしてその家族の方々の表情をみて、何と明るく、悲愴感のない生き生きとした闘争だったろうと感銘もし、救われる気持ちでした。

昭和四十六年の閉山は、東部硯からの撤退による後始末と、細々と出炭による借財の返還、それにも増して温泉の確保こそ至上の命題であった。この様な背景の中で、昭和

五十一年までの西部炭硯の、五年間に亘る本邦最後の坑内採掘が開始されたのである。東部硯の揚湯停止、西部硯での深部よりの撤退は徐々に水位の上昇をもたらした。この様の中で、

### その一

某月某日 日曜日 朝早く電話で白鳥ポンプ座手前二つ目の目抜から高温の湯が浸出して居り、足に火傷を負ったとの報告があった。採炭事務所に急行して詳細に検討した結果、連坑の排水路が天井崩落によって堰止められ、溢水した湯が入気坑道に流出したものと考えられる。

直ちに水位低下の為、抜水ボーリングした立孔の閉止を行うと共に、通気の量を確めて崩落と判断したが、摂氏五十度以上の熱風で現場に近づく事が出来ず、止むを得ず神

にも祈る心で目抜に半ダムを構築し水位を高めて、堰止めて居る崩落餅を押し流そうとの作戦に切り変えた。

半ダムの構築は終ったが、徐々に水位の上昇が見られ、入気坑道の電車坑道を温泉が流れ出し、白鳥ポンプ座のポンプ運転も危ぶまれる事態となった。ここで、下部で採掘中のロング払を放棄することに決定し、六〇〇メートル電車坑の連坑に集まる排水を中央斜坑に流すことにし、熱気の中で交替でその作業を行った。急流となって迸る温泉に、これで採炭も終りかと杳然自失、気を取り直して白鳥ポンプ座の運転続行に全力を傾注した。本社資材に対するハインチエンビパイプの緊急手配、ポンプの手配、ケーブルの手配等々。

高温水は水位を増して入気坑道一杯となってポンプ座の方向に流れ出し、ポンプ運転マンは水風呂に入って計器を監視し、三〇分程度の勤務しか出来ない。高温水の中を炭車に乗って交替勤務である。労働組合あるいは機電係主任からは労働力の限界である旨の緊急連絡が入る。ここで放棄したら湯本温泉は自噴以来の歴史を閉じる事になる。心を鬼にして続行した。

同時併行的に進めて居った入気坑道の臨時バックの完成とポンプ運転によって、漸く入気坑道の温泉水を排除し、

白鳥ポンプ座を死守することが出来た。総力の結集が温泉街を、そしてハワイアンセンターを守ったのである。あの時、人災もなく、停電もなく、天が我に味方してくれたことと感謝すると共に、天の恵みの温泉を死守してくれた西部砦の全従業員に心から礼を述べたい。

後に崩落箇所を修復するのに一ヶ月近くを要したが、高さ五メートル以上の崩落で、サラサラとした砂岩が完全に排水溝を堰止めて居った。高温多湿の中でレール枠はボロボロで支柱の能力はなく、全面修復も困難で早期撤退の必要性が痛感された。

## その(二)

揚湯量の減少は徐々に坑内水位の上昇を来たす結果となった。主要運搬坑道である六〇〇メートル電車坑の上部に展開したロングオール採炭で払跡から高温水の出水があり、昇り向きの払いであるのに支柱すると温泉が追いかけて来る。切羽の温度は上昇し、上添の保坑もままならない。更に間の悪いことに払跡より自然発火の臭いと微煙がみられる様になった。

自然発火に対する火源への注水、ビニール幕による遮断、そして払跡に対する放水ボーリングによる排水作業等々によって好転、暗転の連続した日々が続いた。この採炭作業

も、同時に作業が進行して居る温泉揚湯の基盤作りが完成するまでの、必死の生き抜く道であった。

### その三

当時の体験者でなければ坑内の苦しみは判らない。筆舌に尽くせぬもどかしさがある。温泉の確保に執念を燃やした当時の所長岡部元治氏も、常磐興産の役員を平成元年六月退任された。その励ます会にお迎えにと参上した車中で、この当時の苦悩と「湯の確保」の為に闘った皆さんの思い出に話が及び、暫く絶句した事を申し添え、今は亡き岡部所長にこの稿を捧げたい。

以上

### 附記

この稿は昭和二十八年入社が集まりである「おかわり会」で平成元年に発行した随想に寄稿したもので若干修正したことを附記します。



常磐炭砒最後の石炭



## 寄稿

# 私にとっての炭砧

## 「常磐炭田ネットワーク」を手がけて

鞍 田 東

### (一) 発足まで

昨年初、敬愛している先輩・永山亘さんから一通の封書が届き、中から「内郷だから物見て歩き」という薄い、しかし綺麗な印刷物が出てきました。

不沈母艦かと思っていた銀行さえ再編を余儀なくされるという環境の中で、お金に振り回されながら日々を過ごして来ていた私が、退任が決まり、ほっとした途端、自分は「炭砧」に入り、そこで娑婆を知り、育てられたのだということを思い出していた、その時期でした。

しかし同時に、「炭砧への想い」などというものは、炭砧で働いた……「事務屋のくせに働いたなどと大きな口を利くな」と加納さんが何処かで言っているようですが……ここにあるものの「感傷」にすぎないと思っていました。

ところが伺っているうちに、この印刷物の作成に関わって下さった方々が、殆ど「炭砧を知らない」世代であることが判り、驚いてしまいました。

そのうち、その他にも、このような世代の方々が、あちらこちらで、この『常磐炭田史』を補完するような調査・研究をしておられることが少しずつ判ってきました。そこで、もう自分で何かを物することは出来なくとも、このような調査・研究し、或いはご自身の経験を書き残して居られるもののデータベースを作るくらいのことはいないと申し訳ないと想うようになりました。

幸い、昨年七月、東部石炭懇話会の理事会で大方のご賛成が戴きましたので、八月、とにかくにもと、ホームページ「常磐炭田資料情報ネット開設準備について」を発

足させたのです。

## (二) 手をつけてみて

昭和三十二年に入社し、四十八年に西部炭鉱を離れるまで十六年間暮らしていたのですが、第三者の目でその全体像を見るなどという気持ちの余裕はありませんでしたし、まして、常磐炭田全体に目をやることなど考えたこともありませんでした。

しかも、いわきの地から離れて二十年近くなり、地方新聞には目を通すくらいのはしていましたが、今いわきで何が起きているかも不案内。

しかし、年齢をとつての厚かましきで、「知らないことを恥ずかしいと思わない」と割り切ることにして、あちこち歩き回りました。

そして、今、いろいろな世代の様々な立場の方が、夫々の角度から常磐炭田・炭鉱に思いを寄せて下さっていることを感じ、「誰か私の後を継いで下さるという方を早く見つけ、ご一緒に内容の充実に努めてゆきたい」と願うこの頃です。

何方か居られないでしょうか?!

ホームページのアドレス

<http://www.joban-coalfield.com>



ポンプ座

# 西部炭砒概譜

## 砒名

昭和46年5月8日

西部炭砒株式会社

西部砒発足

昭和46年11月

常磐炭砒株式会社

西部砒業所と命名

## 出炭量

| 年度別   | 出炭<br>(t) | 在籍<br>(人) | 能率<br>(t/人) |
|-------|-----------|-----------|-------------|
| 昭和46年 | 599,700   | 1,315     | 456         |
| 昭和47年 | 608,200   | 1,338     | 455         |
| 昭和48年 | 390,300   | 841       | 464         |
| 昭和49年 | 309,000   | 808       | 382         |
| 昭和50年 | 226,000   | 717       | 315         |

## 主要記事

昭和48年5月29日

立坑々底坑内火災犠牲者四名

一酸化炭素中毒12名

昭和48年7月

東二斜坑高温水確認(80℃)

昭和50年5月31日

採炭払切羽より出水

(採炭は続行)

昭和50年7月6日

600メートル電車坑連坑

崩落による溢水事故

昭和51年8月28日

二番方にて採炭終了

昭和51年9月30日

白鳥ポンプ座停止

湯本温泉坑より配湯

人車巻ロープ切断

昭和51年10月29日

退山完了

9月1日 368名  
10月10日 331名  
10月29日 17名

## 西部鉱業所退山式より



岡部所長の退山挨拶（「ドキュメント閉山」より）

身に沁みた「挨拶」の一部

「とうとう別れる日が参りました。……………」

九十余年の輝しい伝統を受け継いでヤマを守り抜き最後の  
一頁を自分達の力で飾り、その終りを完うしたという満  
足感と高い誇りをお持ちであろうと思います。私はその誇  
りを、いつまでも持ち続けていただきたいと願うばかりで  
す。……………」

いまここで、ヤマと別れるわけですが、いまが  
皆さん方の第二の人生の出発でもあるはずです。『別れと  
は新しい出発である』私はこうも思います。皆さん方の第  
二の人生が、御健康で御多幸ならんことを、心より祈念い  
たしまして別れることばといたします。

### 第二の人生「誓」

身に沁みる挨拶有難う御座居ます。私達は別れ別れにな  
らうとも、例え茨の道であらうと、色々な困難も克服した  
人生体験を、最大の自信として、新しい人生を邁進するこ  
とを誓います。握手!!

書  
||  
「落梅風」



園  
部  
和  
夫

書 = 「和氣致祥」



書Ⅱ「和氣致祥」



中  
田  
孝

## 守り抜いた「いわき湯本温泉」

佐久間 宏 殷

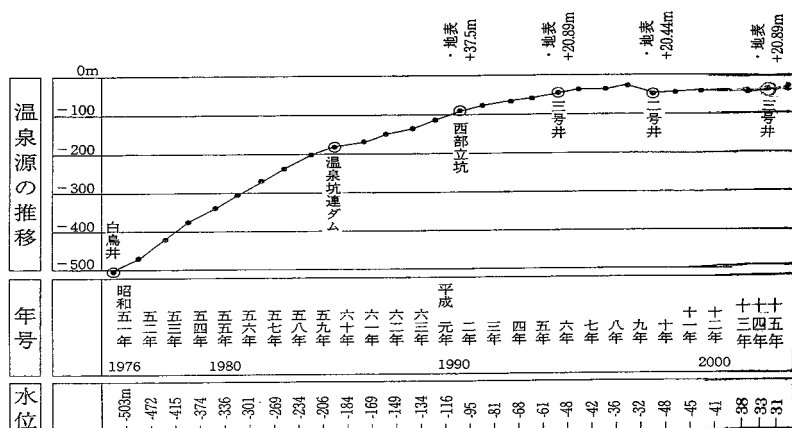
「いわき湯本温泉」企画立案した人。その人こそはかつての常磐興産(株)会長「中村豊」氏である。レジャー産業を返り見られない時代に、先見立案し実行に移したのである。更に現在の揚湯方式に計画実施したのは岡部所長である。毎朝の鈴木機電課長との緻密な打ち合わせが目につく。又大先輩の小林孝氏の熱さをもとめせず、先頭を切つての現場指導にも頭が下がった。然し今日あるのは並々ならぬ過程があった。その各種工事には高温多湿のなか奮闘した人々は枚挙にいとまがないので割愛するとして、西部炭砒時代二回の災害及び事故があった。それについて記して見る。

その一、それは忘れることのない出来ない魔の日、昭和四十八年五月二十九日一番方と二番方の交代時の出来事であった。西部立坑々底の坑内火災。岩石坑道の火の気がない所でまさかの事故。その時は百余名が閉じ込められ、四

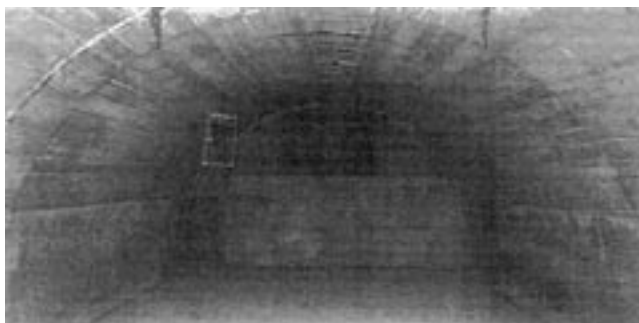
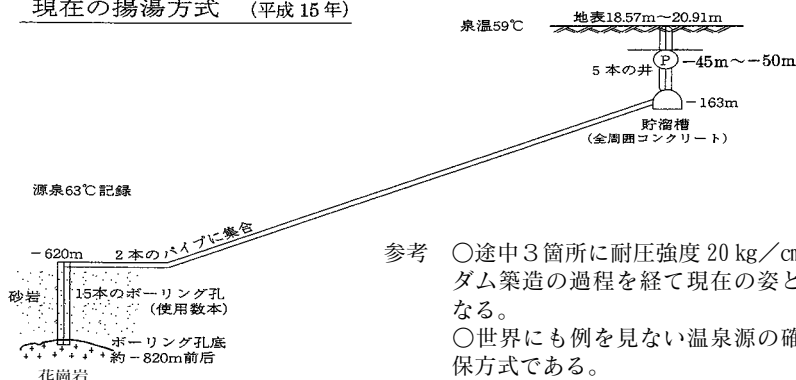
名の犠牲者を出したやるせない事故であった。決死的な消火作業、流煙の中での退避、種々の対策と各人各人魔の一刻であった。その際総責任者より「総員出坑」の命が下った。この事は坑内の水没、自然発火の事態を招き会社の運命を決するもの、そのとき火災は改善の見通しもついたので、坑内現場より強い口調で上申し、命令を撤回してもらった。なお保安要員は大騒ぎのなかを各部署を守り切った。あのとき総員の努力がなかったら、温泉は勿論悲惨な結末であつたろう。

その二、それは昭和五十年七月六日朝の出来事であった。流水路である電車坑の連で、鋼枠腐蝕折損九メートル間崩落事故があり、温泉が電車坑及びポンプ座に流入したのである。此のときポンプ座を守るため、40℃前後（最高測定値46℃）のなかで必死で運転したポンプ運転員。その運転員を全長靴で膝ほどの湯の中を、鋼車を押し送り迎えした

温泉源の推移（昭和51年以降）



現在の揚湯方式（平成15年）



貯溜槽内部

人々。ボーリング孔のゲートを止めに走った人。又一方では排水路を切り替えるため、四〇℃近い灼熱のなかをホースの水をかぶりながら、ダムの築造・ピックで深部に切替え工事をした人々。ポンプの絶縁値も規格オーバー（一部のポンプはパンク）「ヤマを守る」日々の苦勞を思うとき、

撤退を口にするもの一人も居ない。全破挙げての必死の努力。此のとき一分一秒でも対策遅れば神に見放され、大ポンプ座は水没し、現在の「いわき湯本温泉」はなかったであろう。

最後に温泉源の推移・揚湯方式を附記しておく。



## 西部への道

高 木 晋 一

小学校を卒業し中学校に入学した時から戦時色は増々強

く学校での勉強など出来る状態でなかった。好間上野原の開墾や出征軍人宅の農家応援（援農）で田おこし。稲刈り作業を行なった。軍事訓練の一環として夜行軍は、平、平窪、大野、四倉、草野、神谷と道路上で仮眠をとりながら一晩中歩き、翌朝学校に戻る行程をやったり、山中行軍では三大明神山に、登山帰りには山芝を尺四方に切り込んだもの三枚を背負い帰校したり、教練は陸軍中尉の教官に教育され吾々一年生は木銃をもって匍匐突撃等の練習をしただりしたものです。

昭和十九年学制改革により、平商から平工に編入し二年で学徒動員、四倉町いわきセメント会社に狩出された。自宅が平だったので四倉まで通勤したが遠距離者は全寮生となつて作業に従事した。私はここで石炭部に友人と二人で配属された。これが石炭との出会いとなり、西部炭砒まで

行くことになったのです。

毎日、配送された貨車を予定位置まで数人で手押しで持つて行き石炭をスコップで下ろすのです。手には豆が出来たりつぶれたり、それでも仕事をやめる訳にはいかないのです。ある時のこと万石の下ろし口に引いてあったトタン板に履いていたゴム草履を引っかけ、左足の底の部分を十針分裂傷、先生に背負われ四倉町の木村外科に担ぎ込まれた。通院中であつたが看護婦さんに「二階に友人がいるよ」と云われて行つてみると、全身に包帯がまかれ見舞つたが声とてなく二日後には亡くなつてしまつた。貯炭場で作業中崩落した石炭に埋まつてしまい、救出された時は全身火傷を負つた為でした。

平商、平工共に前後して焼夷弾攻撃で焼失してしまつた。平駅前から田町三丁目、南町、大町、仲町、材木町、紺屋町等次々と焼失してしまつた。私宅は現在のNHK放送セ

ンターの所にあつたが戦火は免れたが、家の前にあつた防空壕入口に焼夷弾が落とされ、不発で隣組の方達と生命びろいをした事が思い出されます。

昭和二十年八月終戦、学校に復帰したが校舎がなく磐高の講堂をお借してアグラをかって授業を受けた。一方、本校にバラックの教室が出来上り学校に戻った。同二十二年三年再建が始まり学校が完全に再建され完成した昭和二十四年三月に卒業をした。当時就職するのには狭き門で中々仕事に就けなかったが、知人の紹介で常磐炭砒内郷砒の坑内の事務手として就職する事ができ、平から自転車通勤した。先輩の赤倉さん、熱田さんにお世話になりました。発破係員、現場係員歴任その後、採炭機械係員を経て充填係員として汗を流したものです。

振り返ってみると二十八年間西部炭砒の終了まで、坑内の仕事を務めあげたのは、戦争前後苦難の時代を乗り切つて来た事と、就職して最悪の条件のもと第一線現場で同僚と力を合せて仕事をやり遂げる事が出来たのは、殉職された方達の庇護があつた事と感謝して居ります。私の脳裏には二十名に及ぶ方達の面影が強く焼きついています。

合 掌



西部立坑

## 黒ダイヤと過ごした私の(恵まれた)人生

熱 田 清

私が平工業学校在学中に陸上競技部に入って練習していた頃、常磐炭砒陸上競技部の太田氏の口利きで卒業と同時に同社に入社、内郷綴坑を振り出しに西部炭砒閉山時迄、恵まれた上司の下で一日一日充実した日々を送れた事は、私の人生の中で努力すれば、頑張れば、必ず認めてくれる上司がいたという時代に、生まれ育った事に深く感謝しなければならぬと思っております。

炭砒閉山後は、従業員のその後を考えて、中村社長が数多くの小会社を設立して、多くの離職者を吸収し生活に支障のない様にしてくれた。この様な立派な社長の下で育った管理職の数多くの上司は、其の意を汲んで部下に接する立派な人が多かったのではないかと思います。私は閉山後に小会社の東北設備(株)に移籍させて頂き、其の上、妻の弟まで世話して頂き、上司に恵まれるという事は其の人の一生を幸不幸にもする大切な事だと深く痛感する次第です。

此の私の人生に比べて、現在の若い働く人々は会社又は上司に恵まれた人々が本当に数少ないのではないのでしょうか。リストラとかいつて会社の都合で簡単に働く人の生活を破壊してしまう、此の様な事で人の痛みを知って事を処する会社又は上司が生れるとは思えない。

私の炭砒時代の様な会社に対する信頼、又は上司に対する信頼が大切にされる様な世の中の良い空気の流れは起り得るだろうか？

## 回顧しながら

及 川 義 一 郎

当時戦後荒廃せる国土、食糧難の時代、戦後復興のため経済再建に賭けて政府の強力な国策として最重点に石炭生産を特定、鉄鋼、硫安肥料、等の生産なければ復興なしと報道され、食糧事情困窮せる時でありました。石炭産業重要故に雇用条件もよく、食糧加配米あり炭砒の魅力に憑かれ就職する。坑内作業にも多種多様あり初めに綴新斜坑幹線保坑係に配番を受ける（田島主務）。

作業は先輩の手順、方法を習得と同時に自己勉学の重要なるを知り、日々努力す。配番時上席各位の保安教育、作業指導等身を以て体験した。作業成果は保安を守り仲間同志の和、協力、手順が増産の原動力となり大切である。

昭和二十七年一月、南部斜坑一斜坑に配転（秋山主務）石炭掘進後カッペ採炭に配番切羽環境悪化厳しい作業続くも度々の重圧ありて中止。

昭和三十年更生二斜坑左払配転（掛田主務）総破し採炭

で熱風に悩まされ乍らの増産でした。特に昭和三十四年十月東部砒の排水計画あり湯本砒六二〇メートル岩石堀進に配転となる。（文挟主務、故野地主務）

ロッカーシヨベル使用、日々進行あの地熱、高温、出水切羽面に古俵かスチール板を立て防護し、穿孔発破、連日39℃～40℃灼熱とはこの事か。一人が冷凍水を背中に掛けながらの作業。熱中症にも悩まされ苦闘続く

「我がランプ。虹色に見ゆる水箱に

飛込むいなや、梅干食らふ」

高温出水多くなり苛酷な状況作業中止となる。

昭和三十六年湯本六坑第二本線左五片払に配転（麻生主任）総破しカッペ採炭高温の切羽で頑張る。昭和三十九年七月重圧によるあの瞬間鉄柱下縮する音、風圧、未だ脳裏から離れない。前例を見ても自然条件は突如として発生する不測の状況を思い出します。

昭和四十二年鹿島砒第二本線左五片払に配転（阿部主任）。幾多の苦難克服、一括指導指示に依り出炭、充填、共に新記録達成出来た事は日夜全員の努力の結集にほかない。

昭和四十五年十一月十四日増産計画により西部砒東一斜坑五片払に配転出水払面に出て苦勞する。

昭和四十六年一月六日のニュースは衝撃であつた。黙々と増産に努力した我々だが無念である。だが環境問題や公害問題対策上止むを得ず閉山となる。

#### 閉山後保安採炭続行

同年五月十七日、西部炭砒転入、採炭掘進、ロードヘッター使用による自動的に切羽面を切削しながらコンベヤに流し込む掘進能率。増産にはよい機械だった。

充填払（横田主務）いろいろな条件乍ら全員よく頑張り増産に励む。

昭和四十八年五月、坑内火災発生辛い思い出となる。御冥福をお祈りいたします。

排気坑巡回中、運搬ベルトコンベヤ落口附近にて火災発見。至急ベーシング連絡目拔ホーム座より消火器をもち現場に急行消火出来た。

急報で駆けつけた人達皆んな安堵の胸を撫でおろす。原

因の物を採炭事務所に届け状況説明上席より称賛される。増産体制中払切羽異状出水あり、対策上水抜坑掘進排水作業と脅威に耐えながら増産に努力した。残念乍ら昭和五十一年八月二十八日二番方で全面閉山となる。皆さんの御指導に感謝申し上げます。

○お別れの最後の宴に励まされ

第二の人生に仕合わせあれと

○元気で暮らせと呑み交す

男涙のコップ酒なり



## 第一日目の出来事

徳 山 弘

私の忘れられない事の一つに、昭和四十六年の閉山から新会社に移行する第一日目の出来事について書いてみます。

当時、長女は平商生で長男は中学生でした。新会社は旧西部砦をそのまま引継ぎ操業するにあたり、募集があると聞き申込みました。採炭機械の星由雄さんが言うには、俺は上司から再三に亘って残ってくれと誘われたが、徳山君は補欠になっていると聞かされ不安でありましたが、どうか採用になりました。

新会社へ移行するためには、八日間の操業中止をする必要があるとのこと、その間、坑内の保安を守る人が必要とのこと、私もその一員として配番になり、第一日の一番方に出勤して無事につとめて帰って来ました。

夕食を済ませてゆっくりして居たら、三番方で、五百八十米坑と、一、二卸方部の係員の都合がつかないので三番

方に出る様にとの連絡で、仮眠する間もなく出勤しました。

番割所に行くと、五八〇メートル方部に鈴木さん、一、二卸方部に角田さんが指名され出勤して居りました。三人で入坑して、まず、一、二卸と五八〇メートル方部を巡回して二卸へ来たら、鈴木さんが、今日一日中休まず両方巡回するから二人で巡回させてくれと言うのです。だが、私としては、すでに事前配番になって入坑した者を私の一存で勝手に変更する訳にも行かず断りました。鈴木さんは少し時間が過ぎてから腹が痛いので帰ると言って帰りました。後で思ったのですが、火防屋と一口に言っても臭気・発煙・発火と進む自然発火の徴候を早く見つけて対策するのに必要な道具とやり方を知らず、一度も火防屋をしたことのない者としてみれば、不安もあり一人で巡回する事で心細さを感じたのではないかと思いました。当然、その次は私の仕事になったのですが、五八〇メートル方面は余す

ところなく隅々まで回って心配のないのを確かめて、一、二卸も気がかりで角田さんに様子を聞き先ず大丈夫だと思いい、もう私も限界だ少し休むから何かあつたら知らせるように話して横になった。何分位したか解りませんでした、角田さんが急いで走って来て「現場、現場大変だ、火事だー」と言うので飛び起きて「何処だ」と大声で聞いたたら、二片だと言うので「よしお前はこの上に消火器があるからもつて来い」と叫んで二片へ行ってみると、煙が坑道一杯に広がっておりまして。しかし、煙はまだ青いので、よしこれなら入って行けると思ひ中へ入って行くと右側壁に火が見えるので、その手前に注水中のホースのあるのを思い出し手探りで探したら運良く手に当たったので、パイプを抜いて煙に向けて水を掛けながら進んで行くと、矢木に火が付いているのを発見した。水をかけると火はすぐに消えました。火元は二メートル位奥の方から徐々に手前に移って来て、その時矢木に火が移ったのですが、丁度その時に見付けることが出来、事なきを得たことを心強くうれしく思いました。あと方への申し送りも終り、忙しく大変だった一日も無事に終り、やっと胸をなでおろした、ある一日の話でした。



鉾山救護隊

喜寿過ぎて年は老いても好きなこと  
溪魚に引かれて春溪に立つ

徳山 弘

## 常磐炭砒の思い出

高 橋 英三郎

私が常磐炭砒に入社したのは、昭和二十八年でした。当時、市職員昇職員の初任給が、七千円の時代でした。

常磐炭砒、採用人数が百人のところ二百人前後の応募数が有りました。当時習技生制度が出来たのは、たしか、昭和二十七年だったと思います。

私は、専科二期生に採用され、初めて入坑した時は、吃驚する事ばかりで、発破の音・発破後の火薬の臭いそれらに慣れる迄、長い時間がかかった記憶があります。それでも、昭和五十一年の最終閉山の時は、専科二期生では、私が最後の一人でした。

私は常磐炭砒三代目を無事勤めさせて頂きました。

私の祖父は、いわき炭砒、父の時代で入山炭砒と、いわき炭砒が合併して、常磐炭砒となったわけです。現在考えると、懐かしく、炭砒の思い出が甦って来ます。

今でも、常磐炭砒と関係のある人、それに石炭には、心

から感謝しております。

炭砒(やま)ぐらし 掻き分け 遠き

枯れ尾花

やまざくら 散りて 研山

消えにけり



## 思い出の西部炭砒

藤 林 雄 一

私は昭和二十一年一月に、縁あつて鹿島砒に入社し、実採炭に従事し、初めての坑内作業に随分緊張したものだ。た。

持ち前の粘りから、スピードで先山となり、二十二年であつたか、優良砒員として胸にリボンを付けて、昭和天皇の六坑入坑に際し、待合室で大勢の仲間と、陛下を目のあたりに拝顔する栄を得た。

カンカン帽子に背広姿、然も背中に汗が滲んでいて、惧れ多くて、涙が止まらなかった事が、強く深く印象に残っている。

MPの銃をかざしている姿に戦争に負けたと実感したものだ。

我が一生で一番思い出に残る出来事であつた。自来昭和四十六年の、思いもよらなかつた閉山迄、東部砒採炭に在籍した。

別に特殊技能を持っている訳でなく、炭砒の仕事に愛着があり、「西部炭砒」を希望して運良く入社させて頂いた事は、感激であつた。

初めての西部砒は、東部砒と違って、石炭が酸化し易く、自然発火が多く、火防員がいるのに驚いたものだ。

最初は三交代を命ぜられ、各所巡回して保安の責任を痛感した。この炭砒こそ本州最後の炭砒と自覚し、身を挺して黒ダイヤ生産に従事することを固く誓つた。

払に入れば、ドラムカッターの炭壁を切削する響音、黒々とした石炭がコンベアーを流れ片磐のコンベアーからベルトへと流れ、ポケットへと向う。立柱組、拔柱組、移設組、オペレーター等、黒ダイヤ戦士は、炭塵で顔が真黒、それを監督指導する我等職制もマスクを掛けた顔が真黒。昔は拔柱しても払跡が落ちない時、拔柱組が払跡天磐を鑿孔して、火薬を装填し、我々職制が発破を掛けた。

今思うとこの時が重圧が来るか、崩落して荷が抜けるかの境で、一番緊張した。空気充填が出来てからこの危険は無くなり、助かったものだ。充填組の苦労は称賛に値すると思う。皆西部炭砒は最後の炭砒と自覚し、保安を重視して身の安全を計り乍ら務めて来た。

昇坑後の事務所での一服が本当においしく感じたものだった。

思い出に残る採炭に坑道掘進、即ち払の上添下添を作る為に掘進する作業だ。

西部炭砒では八卸の掘進を担当した事が思い出される。

坑道掘進で一番大事なのは、中心を曲げずに掘進することだった。杵を入れる時少しでも左右の脚の位置が違うと、四、五メートル進まぬ中に坑道が曲がってしまう。中心を外してよく上司に叱責されたものだ。噴霧器の移設、風管の延長、切羽元の送りレール。皆懐かしい名稱だ。

送りレールを甘く見ると空天井となり危険となるのは充分承知だが、ついつい、遅れ勝ちになったものだ。それをして注意して砒員諸君に送らせ、天磐をおさえて安全を確保するのが我等職制の仕事。又風管先をあげるとガスが滞留する。採炭現場は油断も隙もなかったと思う。

炭塵抑制の噴霧器が油断すると、止められてしまった事

もあつたなあ。

西部炭砒は東部炭と違って、自然発火が発生し易かった。火防員は大変な仕事だったと思う。

よく小さな煙、かすかな臭いに気付いて穿孔し、注水してくれたものと、今更乍ら大事な砒員であつたと感謝している。

若気の至りで無茶をした事も、懐かしく思い出される。坑底火災の時、夢中になって上司同僚と消火器を持って、杵上杵外の矢木類が燃えているのを、水管が繋がる迄一生懸命消火に努力した。考えれば脇に火薬庫があるのに、若し爆発したらと内心ハラハラしたが、上司から雷管が先にパチパチと破裂した事を耳にし、又自分も確かに聞いていたから、真正正銘なところ出来たものだ。私も命を大事にしたかったから。

又、排気坑が崩落してポンプ座に流れる高温の湯が入気坑側に流れ出る出水事故にも遭遇した。今思えば本当に無謀で馬鹿な行動だったと思うが、ポンプ座の砒員、係員、ポンプに異常が無いかと確かめに、入気側より源義経ではないが、砒車の上を跨ぎ、跨ぎながら高温の中を進み、やつとポンプ座に辿り着き、ビニールハウスに水箱とエアーを入れて、頑張って勤務している砒員、係員を見て励まし、

ポンプも大丈夫と確認して、入気側へ又炭車を跨いで戻り始めた。坑口の明りが見え、ヘッドランプの灯りがチラチラ見える個所で、熱さの為朦朧となり、だんだん熱中症気味になり、待機していた砦員の方々に助けられ、担架で昇坑した思い出が忘れられない。御迷惑をおかけして申し訳なかったと、深く反省したものだ。

振り返れば、私は実に良き上司、良き同僚に恵まれたお蔭で、恙がなく、閉山迄の五年間を務められたものと、心から深く深く感謝している次第であります。

拙作ですが、「俳句」を少し並べてみました。

排気坑 白き煙りや 朧月

風光る 坑口後に 入坑し

真黒な 顔と白き齒 炭砦（ヤマ）男

一服の 旨さ求めて 昇坑す

ボタ山も 消えて我が身の 年を知り

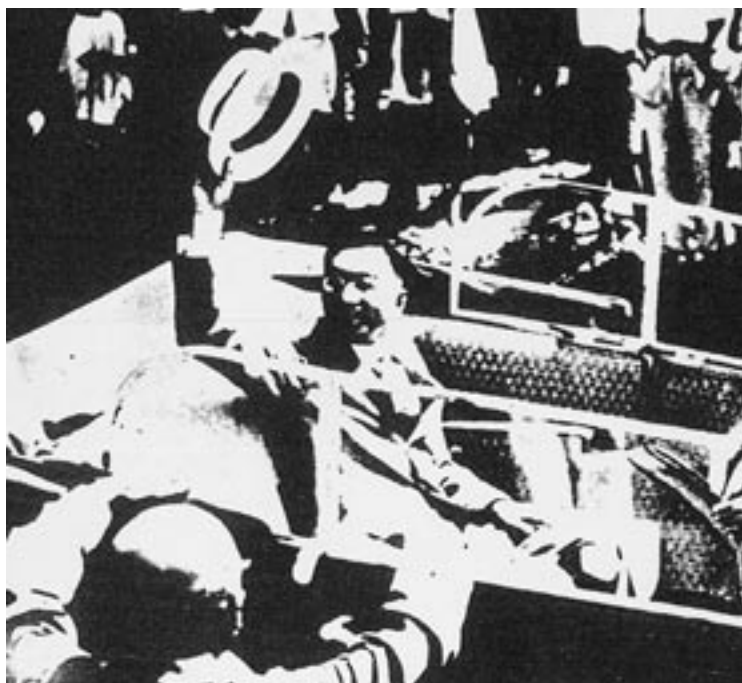
化石館 炭砦（ヤマ）を偲びて 訪れり

さて、皆さん、毎日如何お過ごしですか？

大切な大切な自分の人生、楽しくそして健康に注意し「いきいき」と過ごそうではありませんか。

それには、食生活に注意し、毎日運動を欠かさず、趣味を沢山持つことと思います。

やりだしたら「三日坊主」では駄目!! 少しずつでも継続することが、一番大切です。残された人生、最終仕上げを楽しく、明るく、いきいきと過ごそうではありませんか。



熱狂的な歓迎をするヤマの人たち

## 天皇・湯本六坑に御入坑

昭和22年、戦後の東北を旅行した天皇陛下は、8月5日常磐炭砒を御訪問になり、当時の石原幹一郎知事や大貫経次社長の案内で地下500メートル地点の切羽作業をご覧になられた。

その日から約2年前に敗戦した日本にとって、石炭産業は復興に欠かせない大事な資源開発でもあったことから、天皇の激励訪問ともなったのだが、当時常磐炭砒は月産3万トンの出炭計画を掲げていた。

炭砒訪問のときに、天皇陛下は次のような御製を寄せられてもおられる。

あつさつよき磐城の里の炭山に  
はたらく人をおおしとぞ見し

## 悩まされた「自然発火」

佐久間 宏 殷

当炭砒に於いて最も悩まされたのは石炭の自然発火である。常磐炭砒の他砒に於いては年二、三件位であったが、当砒では日平均四件と桁外れの状況であった。そのために日常注水も当所一二〇ヶ所程あり、合理化しても四〇ヶ所を下らなかった。及びもつかない状況であった。その自然発火の恐ろしさ・原因・取られた処置について記述しよう。

### その一 自然発火の恐ろしさ

石炭の自然発火は、その酸化により起るものであるが、若しも一個所の自然発火でも、その対策・方法を誤ったり、時期を失ったりすると、一方部を密閉するようになるばかりでなく、ガス炭じん爆発まで発展し、莫大な損害と、貴重な人命まで失なうことになる。

西部炭砒の前身である磐崎砒において、私が遭遇した例

が常磐技報に掲載されてあったので次頁に付記する。当時は入社七年目の三交替係員であった。その時は、日曜日の三番方で、同個所の下部担当であった。次方の係員が予定の午前六時になっても来ないし、本隊も午前六時半を過ぎても到着しない。不思議に思っ、本卸の斜坑上方を見たら、ヘッドランプの照明がチラホラと点滅して居た。その時は板張り作業中であつたのである。当日は三番方より二番方になる日であり、通常午後一時三〇分入坑であるが、状況把握のため一睡の暇もなく午後〇時三〇分に入坑した。そして密閉作業中、フラッシュと呼ばれる二三回(総計 二九回)の小爆発に遭遇したのである。幸に人員に損傷は無かったが、その恐ろしさは脳裏より離れず、二度と繰り返してはならないと、心に誓った事例であつた。又私が骨盤骨折で入院中の事例であるが、同砒で昭和三十一年三月九日に、自然発火火災に依り、巻立より通気が逆流、

## II 主な自然発火発生例

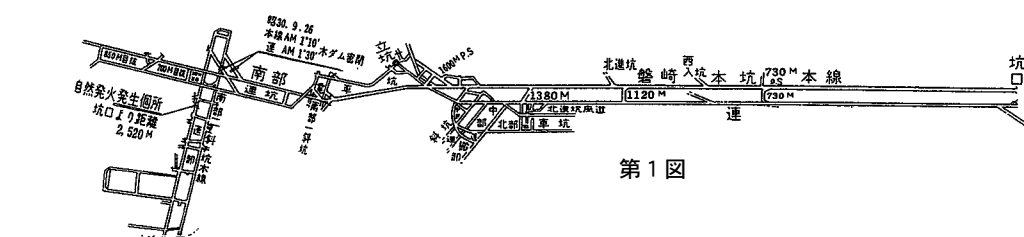
### 例1. 西部砦磐崎本坑南部二斜坑

#### a) 状 況

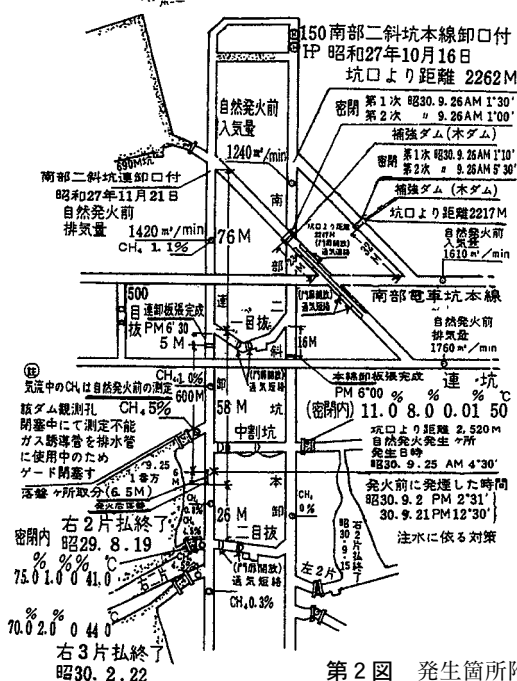
発生箇所は第1図及び第2図に示す様に、南部二斜坑連卸（沿層排気木枠坑道）の中割坑の下部10mの所で9月2日14時30分自然発火を発生し、その後9月21日12時30分に再発し注水中であり、自然発火当日の9月25日も微臭があり、注水中（3/4時のゴムホースで雑用水を使用）であった。当日3番方の警戒夫3名（2番方は2名）のうち1名は、3時50分に各箇所を巡視し、異常のないことを確認し、その後当該係員が40分おくらせて、4時30分に巡視した時は該箇所が発火していた。

該箇所の注水管の取出しが、火災の下部になっていて警戒夫に消火器6本を運搬させ消火させたが、坑道枠の燃焼により天棚が崩落したので消火が出来ず、6時0分に1目拔、7時0分には2目拔の各門

戸を開放短絡し、連卸2目抜部より落磐箇所（発火箇所附近）の消火のおよび取分作業に15名、中割坑よりの連卸口に消火班2名を配置し、消火に努めたが、坑道枠の燃焼拡大によりついに密閉することに決定した。密閉は本線卸1目抜下部16m（18時0分板張密閉を完成）、連卸は1目抜下部5m（18時30分ガス放流および消火用のための上、下約240cmの部分を残して木練瓦密閉を完成）の位置に構築した。しかし19時30分頃密閉内の爆発により本線板張密閉が破壊され、その後19時40分頃および20時0分頃再び爆発があり、各箇所の密閉作業を中止し、後退して南部二斜坑巻立本坑および連坑に密閉を構築し、10月1日には本密閉を完成し、消火した。しかし、人員に損傷は無かったが、第3図に示す様に密閉完成までに29回の爆発があった。（第3図参照）



第1図



第2図 発生箇所附近の自然発火前後の状況

#### b) 原 因

- イ) 消火対策の不備と警戒方法が不十分であった
- ロ) 排気坑道が木枠坑道であった

#### c) 損 害（損害経費は、災害当時の金額で算出したもの）

- イ) 出炭減 6,000 屯（18,000,000 円）
- ロ) 放棄炭量 92,500 屯（277,500,000 円）

#### ハ) 人 件 費

|      |                  |
|------|------------------|
| 採炭関係 | 201 人（183,114 円） |
| 機電関係 | 53 人（45,744 円）   |
| 保安関係 | 7 人（5,500 円）     |
| 計    | 234,358 円        |

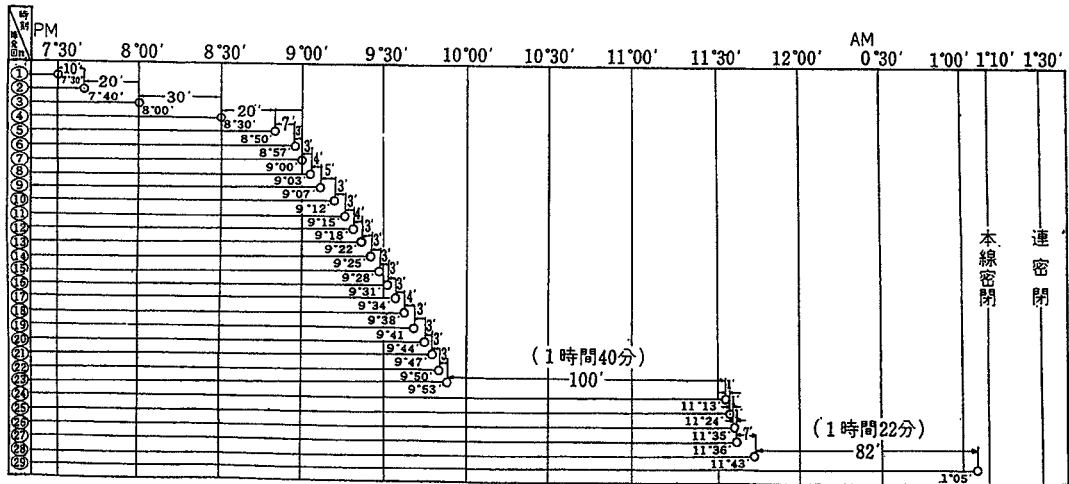
#### ニ) 材 料 費 58,780 円

#### ホ) 埋 没 品 35,288,960 円

#### ヘ) 合計経費 331,082,098 円（約3億3千万円）

#### ト) 損失時間 2,319 時間

第3図 爆発回数



煙が入気側に流れ込み十四名が一酸化炭素中毒死の悲惨な事例があった。ベッドで悲しみに暮れた思いがある。

## その二 原因

坑内に於ける自然発火は、あらゆる原因が累積して起るものであるが、自然条件の起因するものが主要素であった。列挙して見ると、

- イ. 高温水の湧出（摂氏五九度〜七三度）
- ロ. 地熱高温（摂氏五八度〜六八度）
- ハ. 湧出メタンガス多量
- ニ. 断層多数
- ホ. 粉化し易い厚高層（三メートル〜四・五メートル）
- ヘ. 軟弱な下盤

ト. 着火温度の低い炭質

以上の条件に加え、注水の滲透水により、軟弱な下盤の盤膨れ現象・炭層粉化とつながり悪循環の繰り返しとなった。技報には、「掘進後一六日にて○・七メートル〜○・七九メートルの盤膨れ」と記載されてもあった。

## その三 取られた処置

前述したように、此の発生を完全に防止することは非常

に困難である。従って自然発火の発生を出来る限り初期に発見し、被害を最小限に喰い止めることが必要である。先ずその兆候は発汗より始まるが、此の時点では発見がむずかしく、次に特有な臭気が発生することである。それは方部毎の総合排気で、線香の微煙位でも、臭気を感じられた。此のために方部毎の坑内詰所は総合排気を確認する位置に設定し、入昇坑時の職制の臭気確認。「火防ヤ」と稱する警戒員を原則として、沿層坑道二キロメートル以内一名・二キロメートル以上二名とし専属警戒対策にあたり、現場交替がなされた。その他取られた処置について列挙して見よう。

イ. カメロンポンプによるフライアッシュ注入（方部毎に常一番又は三交替により要所々々実施）  
ロ. 大型注入機による炭壁注入（砒として一台導入し、重点的に実施）

ハ. 目拔設定位置を出来る限り、距離を長くした（局部扇風機・風管の大型化により）

ニ. 全層採掘（モール鋼枠の二段掘進を実施）

ホ. 沿層排気坑道の一部を岩石坑道に切り替えた。

ヘ. 坑外プラントより、フライアッシュ流送し、不要坑道の充てん及び遮断（此の方法は、完全に通気遮断

となり、画期的な効を奏した）

ト. 沿層目报名入口に消火栓を取り付け、四分の三インチゴムホースを坑道の長さ分設置す（二分一秒の争いに備えた）

チ. ページングと稱する警報装置を必要ヶ所に設置した。リ. 各方部毎に、非常倉庫を設置し、員数を決め、遮断用材・消火用具等々を格納した。

ヌ. 万が一に鑑み、方部毎の巻立に遮断位置を決め、切り込みなどの準備をした。

ル. 崩落ヶ所があれば、直ちに対策し、消火不能ヶ所をなくした。

ヲ. 砒としては、西部炭砒甲種鉱山救護隊が設けられて居た。（自然発火ではなかったが、人道立坑々底に於いて、瞬時の火災があり、出動があった）

#### あとがき

以上は私が平地学同好會に「石炭の自然発火（坑内管理篇）」として投稿したものを要約したものである。とにかくにも悪条件下にも拘らず、主任以上には社内電話があり、二四時間の勤務体制に等しかった（当時は電話が一般に普及されていなかった）「災害防止」「負傷減少」「出炭



確保」の三大方針のもとに、全員がただひたすら責任感で管理した事は、心強く頭の下がる思いである。しかし何と云ってもその主要素をしめたのは自然発火対策であった。

元西部炭砒採炭課長



炭住解体

## 石炭とのふれあい

阿 部 敏 雄

昭和二十一年から昭和五十八年までの永きに亘り、生活の糧として稼働した過去を今更に思い返せば、戦後の荒廃の世情の中、国の復興の礎は石炭産業にありと云われ、物資食糧の全く不足して居た当時、比較的石炭業界は恵まれ傾斜生産方式と云われ、石炭と鉄を優遇し石炭と鉄鋼産業が戦後の復興を支えた事は事実であり、黒ければ何でも良い時代に入って行つたが、石炭の時代は燃える石に始まり約百年位で終焉を迎えることになった。

此の中にあつて原始的な手掘は論外として、発破による切廻し手積採炭から長壁式採炭を経て全断面掘削全充填までを経験した事は大変貴重なことである。

此の間の変遷は採炭方式の移行と共に坑木から鋼枠へ、石炭運搬もトロコから炭車へ、そしてコンベヤーへと移行したのは時代の要請かとも思われるが、併せて採炭機械もジブカッター、ドラムカッター、レンジング、ローダー、

ロードヘッター、自走枠等々次から次へと進歩変遷して行つたが、未熟な技術保守管理が機械化に追いつけず、その効果を充分に発揮出来得なかつたのは残念の極みであり、こうした中、石炭から石油への転換エネルギー革命は容赦なく迫り来て「スクラップアンドビルド」として生き残るには能率の向上こそ絶対の条件であり、懸命に努めた事も今も強く印象に残るものである。

今、この様な時代状況を次の世代に語りつぐことが出来得ないのが慚愧の限り思うものであり、先に先輩が出版された『灼熱の常磐炭砦』で過酷な自然条件については今更に申し述べるまでも無いが、常に常磐炭砦は労資関係が円満であり、一山一家を縹渺し平穏な関係にあるものと云われて来たが、その実、末端現場では常に軋轢あつれきを生じ、職制はその解決に精力を使い、遂に事なかれ仕儀が生じ、強いでは保安に能率に著しい影響を與えたと言つても過言では

ないと思われる。

今にして思えば、これ等は総て過去の事であり懐かしささえ覚えるものであり、かくして、永きに亘り、職制諸候の特段の協力があり、なんとか山も谷も乗り越えて来られたものと心から感謝申し上げます、職制会も佐久間様のリードで今日まで続いて来た訳ですが、今、将に解散の時であり、何かを思わん。最後になります。長い間大変御世話になりました。皆様の御多幸御健康を念ずるものです。



西部礫業所立坑全景

## 私の半生記

永 山 茂

昭和十八年十二月に、入山炭砒株式会社の採炭係、修技生として入社。坑内詰所で書記の仕事を手始めに、採炭現場の修技生中に常磐炭砒株式会社となり、湯本砒採炭係三交代の現場係員として三十年勤務しました。其の頃の事は今でも走馬燈の如く思い出されます。高温多湿な坑内での思い出は、先ず辛かった時の事が出て来ます。然し、結構

楽しかった事、感動した事数多くありました。多くの人と  
の出会い、採炭現場係員として人間関係に苦労したおぼえ、  
又、保安確保と採炭技術の難しさと、危険は身にしみまし  
た。

終戦後は、外国の採炭技術が導入されロング採炭法で、  
鉄柱やカッペで保安を確保しながらレンジング・ドラム  
カッターでの採炭作業は豪快でした。採炭跡は、鉄柱やカッ  
ペを回収しながら、研を充填する様子は脳裏に深く残って  
おります。又、作業現場の千変万化に対応した処置には、

上司始め先輩各位のご指導と、ご鞭撻のお陰と深く感謝し  
ております。炭砒が閉山されて退職後は、気持ちを切替えて  
一八〇度転換、保険会社に入社、いわき商工会議所の小規  
模企業所の共済制度普及を担当、本所平地区所属の各事業  
所を巡回すること、約一〇年、商売のこと、税務のこと等  
勉強になりました。

退職後は晴耕雨読の予定で、趣味を楽しんでいます、  
地域のボラ  
ンティア活  
動に狩り出  
されて毎日  
行事に追わ  
れて居る此  
の頃です。



南部不動滝（水墨画）

# 保安大学

石 嶋 一 二

炭砦(ヤマ)の近くに炭住と呼ばれる炭砦員の社宅があった。二戸から六戸が入居する棟つづきの木造の長屋がびっしりと並んでいたところだ。ここが、俺を育てくれたところだ。最初は、六畳と三畳の二間と台所があるだけだった。風呂は共同で水道とトイレも共同、狭い路地は、子供たちが走りまわる。人の声が何時もしていたように思う。

次に越したのは、六畳二間と二畳半だ。風呂、水道、トイレが共同は変わらない。三度目は、六畳と八畳と四畳半の三間の炭住だ。俺はここで結婚した。

狭いぶん何処に住んでも、隣との付き合いは深かった。子供が病気をしたら一緒に病院に、御祝いごともし一緒に喜んでくれた。時には、醤油とかお米も貸したりすることもあつて、お互い仲が良かった。

かつて、いわき地方の発展の原動力だった、日本のエネルギーを支えた炭砦が、人々の心から忘れようとして居る

ときに、ヤマでの、思い出を記しておこう。

ヤマには、保安大学という、保安技術講習を行なうところがあった。忘れることのできない、昭和四十年十二月、労働衛生・新技術見学・実技実習・コンクリートの強度・保安管理・落盤災害分析・救急法・払いの支保・電気保全・系列会社の運営と現況・災害事例検討・最近の災害事例・新技術紹介・賃金問題・炭じん対策・会社事情の説明等が主なる保安技術講習の目的で、各炭砦から参集した。冒頭に、当時、西部砦五斜坑の掘進作業を担当していた俺の話になった。なんで……と思った。上司が報告していたのだ。二番方だった。掘進中の機械が故障した。今なら次ぎ方まで修理できると思った俺は、坑外にさがり本体をトロツコに積み、運搬係の協力のもと、現場に搬入し、次の方が支障なく掘進を進めることができたことだった。

この、西部五斜坑左五片払において昭和四十四年三月の

出炭、五万トンの偉業を達成したことは会社創立以来の快挙で業界の賞賛の的であった。当時の仲間とこの現場を与えてくれた上司に感謝し、大切な思い出したい。

ズリ山が形を変えようが、木が生え緑に覆われようが、心には熱を持ち、煙が出ることもあるでしょう。



入坑

## 炭砒在職中の思い出

佐 伯 勇

常磐炭砒閉山のとき、再就職についていろいろ悩みましたが、家庭の事情もあり、西部炭砒に就職することを決心しました。

西部炭砒も、五年位の操業とか話があり、私はこの五年間の内に機会があれば、転職する考えで就職しました。幸いに、二年位過ぎたころ、今の働いている会社より話がぁり転職しました。

西部炭砒では、常に苦勞の連続でした。いつも、レンジングドラムカッターの動きに神経を傾注し、予定出炭の事ばかり、毎日神経を使っていました。常磐炭砒在職中も、私の係員をやり、氣の抜く暇もなく過ぎたように思います。

一番記憶に残るには、立坑下の火災の事です。私は一番方で、交代時間の時でした。電車坑にでると、立坑下で、火災が発生したとの連絡がぁり、電車待ちしていた人達は

騒然となり、一時はどうなるのかと心配でした。

上司を始め皆様方の一生懸命な対応で、鎮火したものの生地獄でした。今まで一緒に働いていた朋友達が帰らぬ人になり、本当に、悲しく恐ろしい出来事です。昇坑してみると、家族、知人等が心配して坑口に集まっていた事を今でも昨日の事のように、思い出します。現在は、建設業関係の会社に働いていますが、炭砒にいた時の、苦勞が今の会社に就職しても、生かされ何事があっても、坑内での会社に就職しても、生かされ何事があっても、坑内での苦勞、いかにすれば生産成績を上げるかと努力した日々が、転職してから、今年で三〇年を過ぎた現在でも、尊い教訓として、私の胸の中に生きています。

建設業界でも、苦勞の連続ですが、七一歳を過ぎた現在でも、がんばれるのも炭砒時代の教訓があるからです。

## 入社から閉山まで

私は昭和二十四年四月に入社しました。常磐炭砒鹿島砒にて最初は坑内軌道夫、その後、採炭係の坑内書記を数年、発破係員を経てから保安係員となり、主に払採炭を中心に採炭作業に現場の第一線でがんばって参りましたが、昭和四十六年四月に閉山となり退職しました。

其の後、二年間ということで西部炭砒に入社しましたが、結局、五年間も勤務することが出来て喜びました。

五年間のうち、私は泉田立坑近くの払採炭現場に勤務中、二番方入坑して払採炭詰所に着き、作業服に着替をしている時、ページングにて坑内火災発生、退避せよの連絡が入りました。火災は立坑々底排気坑で発生したもので、何人かの方が犠牲になりました。心からご冥福をお祈りしたい。

其の後、二年以上も西部炭砒が採炭を続け五年目に閉山となりました。その間、坑内で大活躍をして参りましたが、使用中の大型採炭機械や各種鋼材料の数々をそのまま放置

村 田 一 二

して来たのが残念にいまも思っています。

その後、採炭課職制会として一年おきに、スパリゾートハワイアンズに一同集り、現状を報告しながらの一杯は格別の味です。年々高令化の進む中で、またの再会を楽しみにしている一人です。



# 炭砒閉山

安 斎 孝 道

## ○ 閉 山

常磐炭砒は、明治十六年に採炭を始めて以来九三年の歴史を閉じ、昭和五十一年、出炭一トン当り、一二七立方メートルの揚水という悪条件のため、採炭コストは、トン当り一五〇〇〇円、売値平均八〇〇〇円、国の補助二〇〇〇円、五〇〇〇円の赤字、掘れば掘るほど赤字、エネルギー革命による、石炭産業の不振によって遂に閉山。

翌年、アルプス電気小名浜工場入社。

## ○ 近 況

平成十五年一月、ペースメーカー埋込み、身体障害者、一級一種。初等科入学、後日

後詰、痴呆症

## ○ 望

- ・ 生計、身計、家計、老計、死計。
- ・ 立派な葬式を出すのは難しくないが、健康に生きることが難しい。
- ・ 明日何をするか、目的のない人は不幸です。
- ・ 生も一度、死も一度、一回きりの人生だから向日葵のような大きな花を咲かせたい。
- ・ 死は案外と楽なものです。目を閉じればよいのです。あとは無ですから……
- ・ 死は恐ろしくないが、もう誰にも会えないのが寂しい。
- ・ 七不思議よりも、謎は夫婦、色目（しきもく）なく、血縁なく。
- ・ 出舟入舟数合わず、夜半の嵐に尋ねるか。

○ 心 法

・ 古は、心の儘に従わぬ、今よ心よ我に従い

・ 浜までは海女も蓑着る時雨かな。

・ とし毎に咲くや吉野のさくら花掛を切りてみよ花のあり  
かを

・ 色即是空……………因縁

・ 俺死んで子供達死んで孫死んで曾孫死んで越巻より葬式

九九



立坑底の乗降場

## 炭砒の思い出

小 針 重 徳

私は昭和二十二年内郷住吉一坑に採炭員として入社、一坑は上層坑で夏などは坑内の方が涼しい現場なので作業のしやすい所でした。

昭和二十九年夏台風により内郷町田川で川底が沈下して坑内全面が水びたしとなり、一時採掘を中止して、磐崎坑に配転となる。内郷坑とは環境がちがい、高温で自然発火があり作業は困難でした。

三十一年に左中部斜坑排気坑にて自然発火による火災が発生して、三番方町田宮沢方部の方十四名が亡くなり、人ごとではなく、次は自分の番かと、一時は真剣に考えました。

私はその後、習技生坑内実務指導員となりました。のちに、新磐崎連絡坑岩石掘進作業に於て三交代同一賃金で作業をし毎月記録賞を貰う。大型払ではカッペ長もやり、その後係員となる。常磐全坑で一ヶ月の予算が三〇万トン、

私の現場大型払では、五万トン、その頃は充填払で作業環境がよくなり天と地の差でした。

その後主任となり、三交代で危険個所の保全、その他なんでもやる全般組として皆によるこんで貰える作業でした。

五十一年の炭砒の閉山は経営者の判断により、あの時点でよかつたと思います。

閉山後常磐製鋼入社、いまだがんばっています。製鋼原料は各社の協力によりなんとかがんばっています。

休みの日は、四、五月は川釣で、ヤマメ、イワナ、六月より海釣です。

毎週休みがくるのがたのしみなこの頃です。

## 坑 夫 の 歌

### (一)

当時（昭和二十九年）、地元の高校を卒業して炭鉱に入ることは、あたり前のことと思っており、常磐炭砒への入社はすんなり行つたと記憶する。

高校野球で鍛えた粘りで、高温多湿の坑内作業の苦痛にも何とか耐えることが出来た。職場に於ける、同時入社 of 習友会に於ける、地区の青年会等の集りでは決して酒飲みがあり、一升酒を平らげる日もあった。

そんな自分を戒めるものに、こんな毎日でいいのかという自問があった。文学書を読む機会を与えてくれたものに、青年会の新聞があった。編集委員のひとりとして常に何かを書かねばならなかったのも要因の一つであったと思う。さて何を書くかとなると大変だった。一番短い俳句を書くうと思いついたのは、中学時代に俳句を作らされた経緯があったからかも知れない。また、高校では国語の成績が良

### 結 城 良 一

かったこともその一つに数えられよう。そんな理由で、新聞の詩歌・文芸欄にも目を通すようになり、自分の作品をためすべく投稿をするようになったが、今考えてみると作品の質よりまず作ることが第一義であったように思う。

しばらくして、坑内である日、新聞紙上で活躍している歌人の飯村仁さんに声をかけられ、季節感の無い俳句より短歌をすすめられたことがあった。五七五に七七をプラスして坑内作業等を詠むように指導を受けた。

飯村さんを通して俳句・短歌の二刀使いがはじまった。

・祖父が掘り父が掘りてなお今に

この炭層をわれは掘りつぐ 飯村 仁

・炭壁をへだてて友の切羽より

仕事始めのドリル響き来 飯村 仁

・落ちかかるひかりは眩し坑道を

駈けのぼり来て坑口に立てば 結城 良一

・腰に吊すランプの液に犯されて

坑夫われらの尻灼け爛る

結城 良一

## (二)

昭和四十八年五月二十九日午後二時半頃、西部炭硯西部立坑坑底にて火災が発生し、坑内に煙が充満し、四人の犠牲者が出た。

私も二番方で入坑したばかり、一番方より申送りを受けて五分とたたない間の出来事だっただけに、火災の火元がどこか判断に苦慮した。我々の申し継ぎ場所は、研ポケツト下部電磁フィーダーであったが、煙はここまで流れて一時は死を覚悟したが、脱出には火元を究明せねばならず炭ベルト坑へ行くも、一番方作業終了者が昇坑をあせり煙の中を右往左往していてパニック状態で正確な状況把握は困難だった。

しばらくして、昇坑を断念した一人から煙は西部立坑より来ているとの情報を得て、坑外事務所の火災かと思ったので、もうすぐ消火してくれるものと信じていたが、一向に流煙は減少せず泉立坑へ脱出するしか助かる見込はないと判断し、引き返して来た一番方とわれわれ二番方の十数名にて、第二研ベルト坑を煙を這いくぐるようにルールに

鼻をくつつけて煙を余計吸わないようにして逃げた。四・五〇〇メートル位進んだ地点で煙が切れた。立坑と立坑の間点でエアーカーテンになっていたのだった。全員の顔に血の色が戻った。助かった。肩を抱き合って喜ぶ者も居た。一番方の大衆係員と煙の充満している炭ベルト坑に仲間を呼びに戻った。大方の仲間が誘導に従ってくれて脱出は成功した。

煙の無い泉立坑側には、一番方、二番方の大勢の仲間が消火作業と煙の無くなるのを見守って待機していた。入気坑の排煙も大部進んだ頃、係員を中心に搜索隊を編成して負傷者が居ないか探索に入った。立坑入口で羽田栄一さんが倒れていた。仮死状態だった。人工呼吸がはじまった。坑道奥でランプの灯(あかり)が見えたので数名で駆け寄った。一人が倒れていた。源ちゃんだ誰かが叫んだ。保坑係員の佐藤源治さんが正気で返事をした。煙は坑道半分以下に少なくなった。

羽田さんは、呼吸蘇生、人工呼吸の甲斐なくかけつけた医師より臨終を告げられた。それでも吉川さんらは人工呼吸を続けたのだが羽田さんは生き返らなかった。

羽田さんを担架で搬送した事務所には、志賀栄次さんが一足先に運ばれていて、羽田さん同様窒息死であった。志

賀さんの息子さんが「おやじ起きろ」をくり返している声を聞いていて事故の重大さを感じ慰めのことはすら出なかった。

この時、警察の方より飯村仁さんが病院で亡くなったと聞き、確認してみたが飯村仁さんに間違いないという。何故飯村さんが坑内に入っていたのだろうか不思議でならなかった。

後日談であるが、飯村さんは、年金取得年令五五才までに坑内勤務が一〇ヶ月不足しているという。坑内勤務一五年以上になるように坑内に入ったと知った。

しかも、西部炭砒に入って半年目の事故で帰らぬ人になってしまったのである。不運の一語に尽きよう。

### (三)

飯村仁さんは大正八年、安積郡三穂田村（現郡山市）に農家の長男として生れる。一〇歳のとき内郷へ移住、一五歳より炭砒に入る。二、三の炭砒を転職後常磐炭砒入社、昭和四十六年の閉山まで坑内ポンプ方、坑外の選炭場に勤務。

短歌雑誌「梢」入会、歌集に「炭層」（昭和三十四年）「地熱」（昭和三十六年）「冬の風」（昭和三十八年）があり、「冬

の風」にて、昭和三十八年度の短歌の部の福島県文学賞を受賞。飯村仁さんの歌集「冬の風」より作品鑑賞をしてみよう。

・ 朝暗に踏みゆく雪はまだ誰も踏める

跡なし今朝の出勤

一番方の出勤途上で詠んだ歌。夜の雪も止み白一色の朝、坑口へ急ぐ作者の緊張感が伝わってくるようだ。「まだ誰も踏める跡なし」がそれを捉えていよう。

・ 共稼ぐ妻と朝朝行き違う午前七時の

わが夜勤明け

前の歌は出勤時を、この歌は退勤時を詠んだもの、三番方の作業を了えて帰る途中、出勤する奥さんと会ったすれ違いの一瞬。「共稼ぐ妻と朝朝行き違う」のさりげない措辞が共感をさそう。

・ 石油より安き石炭掘れという切羽に

六十度の湯が噴き止まず

坑内の切羽近くのポンプ座にて働く、作者の叫びとも怒りともとれる心のつぶやきの聞こえる歌だ。高温多湿の現

場で排水作業に従事する作者の姿が目につく。

・冬の夜の闇に浮かびてボタ山の斜面の

かたちにとりもる電灯

内郷高坂にある住吉ボタ山は周辺の山より高く、平市内や草野方面からも眺められた。ヤマの象徴ボタ山が高ければ高い程、歴史の重みを感じられる。冬の夜空に高く連なるボタ山の灯りが冴え、静寂感が漂う。

・調査団の来訪を待つ貯炭場日日の

炎暑に空しくほてる

坑内のポンプ方より、選炭場へ勤務替しての石炭調査団を待つ緊張感・不安感を詠んだ歌である。国策であるスクラップアンドビルド、採算の合わないヤマは潰す。国の諮問機関である石炭調査団が来て判定を下す。スクラップの場合は政府が炭砒を買上げて、閉山交付金が支払われる。エネルギー革命に破れた貯炭の山がまるでトルソーのようだ。

#### (四)

私も西部炭砒閉山まで二十二年間（二年間休職）坑内の

第一線で働いて来た、季節感の無い坑内で俳句に挑戦したのも若気の至りであったのかも知れない。書き残した作品が、常磐炭田史の足跡（そくせき）の一つにでもなり得ればこの上ない喜びである。

句集「発破音」より

鳶尾草（いちばつ）に触るる落盤のがれし手

口笛を洩らす坑底啄木忌

四月の空へ濯ぎて高し坑内着

坑出でて雪降る中へ手をひろぐ

新たなる年へ連なる研場の灯

炎天の坑漆黒の鉄管呑む

晴るる秋坑夫は黒き痰を吐く

葡萄食む手のみづみづし産後妻

一望の雪嶺となり夜勤果つ

大学祭模擬坑道にドリルの音

夏蝶のゆくへ坑夫のわが行方へ

台風報坑内（しき）の滴り背に熱し

雪泥や一壺にあまる父の骨

坑内にシヨロホフ貌して氷齧る

閉山報寒し半生坑夫たり

「発破音」以後

鹿島立坑ガス爆発 五句

爆臭の漂ふ冬田急がねば

綿虫や首なき裸体横たわり

霜厚し死者の眸ひらく検屍官

雪来るか戸板に黒き爆屍体

検屍長し霜夜の母は狂ひをり

婆にあふボタ山いまは蔵山

リムスキー聴く炎天の松尾村

居酒屋に坑夫の名前忘じけり

登山帽真逆さまに墜ちゆけり

辛口の酒いつよりか鬼虎魚（おこぜ）



中央斜坑巻立坑



## 炭砒の思い出

### 服部 勝

今、自分は、これぞという思い出は無い。自分の頭の中は、どうなっているのか、何かないか、いやある。一体それは何だろうか。

常磐炭砒に入社して寮生活を始めたこと、その寮は努力寮、案内された部屋に行つて、びつくり、オッサン連中がズラリ……

今では自分もそのオッサンをはるかに超えたオッサンです。

磐崎砒の坑口が、寮から現在の烏館団地に向つて数十メートルの所にあつて、その中程に、あの有名な露天風呂、仕事を終えて、帰りに立寄つてその露天風呂にザブン……。春は山神祭典でにぎわい、夏は盆踊り大会で、またにぎわう。

秋は各地区対抗の大運動会、それに文化祭。冬は露天風呂で、ゆつくりのんびり。

五月の行事も思い出のひとつ。湯の岳へのピクニックメーデーがあつた。山頂からは、市内一円、そして太平洋が一望。中でも、茨城方面（五浦）の眺めは何んともいえず。眼下には、いくつかの砒山（ずりやま）が点在。その砒山も、今はもう完全に姿を消して、工業団地、住宅団地へと変つた。

すべて、四十数年前の思い出である。

## 炭 鉱 余 録

佐久間 宏 殷

### ○ 坑底火災時の一出来事

私は保坑連絡所前で、三番方（午後九時三〇分よりの入坑）入坑者全員に、火災の概況及び安全になった事を話し、各方部の保安を依頼し出坑した所、その時は東京鉱山保安監督部の指揮下であり、平支部長より「火薬取扱所爆発の危険あり、立坑よりの入昇坑禁止、西部斜坑の入昇坑に切り替えよ」と命があつた。私は毎月保安巡視に訪れるN監督員に、実態を説明、「火薬爆発の危険の心配なし」と。当監督員が「佐久間さんの云う事なら間違いないでしょう」と申し、命令を撤回して貰つた。

記述は前後するが、当時坑底にて、消火栓設置後私は、消火ホース筒先を持ち「排気は燃えても構わない、絶対人道坑は延焼させるな」と煙の中を号令かけつつ火の粉を消火した。その間数回震動こそなかったが雷管の破裂音を耳にした。又その時私は大きな落石を冠り身を縮めた。幸に

薄かったため保安帽で割れ、首を左右に振って見たが大丈夫であつた。「課長交替しましょう」と声を掛けられ、筒先を依頼した。その後排気に通じる門戸が焼け、一瞬にして通気が変わり、人道坑に煙はなくなった。しめたと消火は依頼し、人道坑より排気坑に、途中罹災者人工呼吸中であつた。「責任者は誰か、休まずやつてくれ」と声を掛け、一旦坑底に戻り、人工呼吸教育者を増員した。それより第一風道坑に入った。火薬取扱所ボーアホールは火焰放射器のように、火と煙を吹き出して居た。その後再度の確認もした。坑底火災も一応おさまった時、Y払主任と焼け跡を落石をさけつつ側壁につたわりながら確認をした。火薬取扱所も覗いた。なお保坑係員に立入り禁止柵を指示したなどの経緯があつた。

記述は前に戻るが、指示通りの入昇坑となれば、六・五キロメートルのバス、二六〇〇メートルの斜坑、及び二六

○メートルの水平と廻り道となり、交替制の無理、労力負荷の限界、種々の手段を打たねばならない思いが頭を駆けめぐった。

災害事であつたが、とにかくにも信頼して貰つたことは、なにもものにも代えられなかつた。今持つて忘れる事の出来ない心のなごみになって居る。「綜合把握」・「百聞は一見にしかず」が確信を得た例である。

### ○ 西部炭砒発足時の採炭ヤの願い

自然発火が桁外れに多く、軟弱な地質で磐膨れのひどい西部砒より、堅硬な地質の東部砒の存続をと。然し硫黄分が多く売れない石炭の東部砒が中止となる。科学者の力で脱硫装置などかならないのか？ 残念至極。

### ○ 西部炭砒の操業推移

西部炭砒二年存続で発足するも、中郷砒の出水で継続操業。砒名も常磐炭砒（株）西部砒業所に改称。東二斜坑の新天地開発も高温水（技報には摂氏八〇度確認と記録されて居る）で断念。立坑近く旧坑縫つての操業となる。事故は無念であつたが五年余の操業。

### ○ 嬉しかった時

努力の甲斐が実り、無事故で記録達成時。

### ○ 悲しかった時

犠牲者・重傷者の発生時。

### ○ バッタかけ（脱線復旧）

当所はバッタの連続。その復旧はツカ・下駄敷き・切張り・テコと技師の腕の見せ所。力のない私には苦しみの連続。数年後はレバールックも普及し、それによるも労力の無駄。木製車より鋼車（二立方メートル）に変わる。巻立設計は必ず略図を書き、曲線半径七メートル以上、落ち込み一台三度以内を限界として、脱線のない巻立つくりに努力した。ちなみに鋼車は長さ三メートル、中員一二八センチメートル、ホイールベース一メートルであつた。

### ○ 直接採炭員の賃金制度

戦後は腕っ節の強いものの氣力に頼ることが大であつたが、逐一改革し、最終的には条件を勘案した一点単価制による基準作業量を設定し半請負給を採用した。それも保安優先支保重点主義をとつた。此れにより各人の意識も高揚

し、自然に負傷者も減少し、高能率となり、採炭員にも会社にも貢献した制度だったと思う。

### ○ 失敗した自走枠

天磐のコントロール維持のため、数台自走枠入れるも、移動毎に天磐崩れ、担当者の大難儀。

### ○ 厚生年金の有難さ

制度の紆余曲折はあったが、知らず知らずに天引きされて居た年金で、今では生活基盤になって居る。無駄は出来ないが有難さ身に沁みる。

### ○ 自己管理

坑内では、メタンガス着火防止のため発火具・喫煙具若しくは煙草の携帯禁止。且つ酒気を帯びて就業してはならない。私達の職責は何時呼び出しあるか分らず、煙草・酒は控えた。閉山後もその延長で、適度な運動を加え、自己管理に徹してゐるつもりである。

### ○ 私の人生指針（炭砒体験より）

一、先づ健康であれ

（健康でなければ何も出来ない）

一、他人<sup>ひと</sup>に迷惑をかけるな

（交替制の責務で痛切に感じた。――

後方に迷惑をかけてはならない）

一、目標に向つて邁進

（常に何をなすべきか。考え且つ実行）



ドラムカッター

# 私と炭砒

鈴木茂富

昭和拾七年四月入山採炭株式會社に入社

## 時代の波動

日本經濟は戰時体制で食糧物資石油鋳物の輸入が禁止され、國交は封鎖となり、國內では資源の収集各家庭には金屬類の供出を津々浦々まで協力を呼びかけ、油の一滴は血の一滴と廃油の再精製に努力をし、農家町の青年団に松根掘りに協力して貰い、終戦まで猛暑中頑張ってくれました。本当に御苦勞様でした。

昭和十九年四月磐城炭砒と入山炭砒が國策により合併し、常磐炭砒株式會社となりました。

## 時代の变革

國民一億總動員拳國一致銃後の護りは強しと、街行く人々の姿に暗雲低く、厳しき戦況に突入した時代を感じさせられました。

## 徴用令の執行

國策により増産体制に協力するよう、徴用令により炭砒にも報國隊員が見られ、増産に勤勞報國隊として、日本魂を以て重労働に食糧も少ないのに頑張った事を思うと頭の下がる思いでした。

## 会社における勤勞報國隊

会社では増産に協力できる健康な坑外従業員より、希望をとり勤勞報國隊を編成し、毎日職場の責任作業終了後増産協力に各班別に入坑し、切羽で石炭積みをして、炭塵と汗で化粧された山男の姿で昇坑すると、人車待合所にいた勞務係員の御苦勞さんとねぎらいの言葉にホットする。切羽餅二枚を手渡され我が家に足を速やめれば、湯本の街は灯火管制で春を呼ぶ声は遠きにある夢枕と思う事もあった。

## 昭和二十年八月十五日終戦となる

道行く人の話声もきかれず、交通機関は乱れ、日銀円の

封鎖により物資のインフレ抑制、新円の封鎖により自由な物が買えない時期があり、生活が大変でしたが、やがて永遠に光る平和の道である事を知り嬉しかった。

昭和二十五年一月坑内書記現場見習として配管坑岩延に勤務す。

昭和二十七年十月採炭准員となり、三交代勤務係員となる。

二十数人の砒員を担当し安全第一を基本に、和のある人造りを教育する。

#### 常磐線と輸送量

日本経済復興に常磐炭砒ここに在りと石炭の増産に励み、全国に名声を響かせ、京浜工業地帯に積出す輸送量の活気は東北本線をしのぐ活気に満ちたと、古老は話しておりました。

#### 行事

会社は東京より一流歌手、一流芸人を呼び従業員の慰安会を数年続け樂しませてくれました。

笠置シズ子、藤山一郎、市丸、霧島昇、エノケン、春日八郎、三橋美智也の有名人が来たので楽しみにしてました。

昭和三十四年職員に昇格

昭和三十五年

炭車脱線器を考案し、技術部に資料を提出し、唯ちに採用される。鉄工場で製作した脱線器を五坑炭車操作場に設置し、炭車を坑内に下げるとき連結の点検不備により逸走した時の事故防止が出来ました。閉山迄使用され運搬事故防止に役立ちました。

昭和三十八年

主務者に昇格し社内電話が自宅に通じる。

切羽で重圧により頭部を負傷、労災病院に六ヶ月通院治療し、無事職場に復帰する事が出来ました。上司同僚の温情に心より感謝して居ります。

この頃湯本六坑に於いて、野地保坑主務者が遅くなっても昇坑して来ないので、救護隊を編成し全員で捜査、排気坑道に野地主務者搜索救護隊員として出動した鶴沼係員、猪狩係員の三名が殉職との知らせを郡司係員の電話連絡を聞いて驚きました。心より御冥福をお祈りいたします。運命は止めることが出来ない前向きの発想で、何時止まるかも知れない浮き沈みと思いました。

昭和四十年八月

木山所長が採炭切羽に石炭積み込みをしている砒員の激励に來られ、頼むといわれ、汗を流しながら詰所に寄った。バケツに用意しておいた氷水を飲みのをうるおし、満足

感を味わった様子だったので、冗談に「氷水でなくビールであれば一段とうまさが味わえる事と思う」と言うと、木山所長は採炭事務所に届けると話されて詰所をあとにして行った。

採炭事務員が私の所に来て、木山所長がビールを届けてくれたと連絡してくれた。さすが常磐の大物だと思った。昭和四十二年

湯本砒より磐崎砒六〇〇電車坑に転勤となる。中田砒長に払準備移行掘進切羽を案内される。現場を見ると傾斜が強く湧水量も多く管理方法に問題があり、積込機運行操作能力が悪い為、払準備移行の遅れる事を知り、中田砒長に積込み方法を変えるべきと相談すると、頼むといわれ切羽を後に歸られた。

“逆は又真なり”を思い出し、捲を積込機運行操作に補助として使用してはと機電係に相談に行くと、捲は炭車の上げ下げに使用する運搬機なので、操作補助には使用した事は無いと反対されたが、磐崎砒責任出炭の確保には払の準備移行の遅れをとり戻すことが磐崎砒の出炭を勝利に導く方法であると話をすると、理解して前代未聞の考えを打破して、捲を切羽に設置し、積込機の運行操作の補助とする事により、能率がアップし、払準備移行が閉山迄遅れる事

はありませんでした。

常磐炭砒の卸し掘進は、当時全国第四位を記録しましたので、中田砒長から伝言があり、誇りに思い砒員にも感謝している日々です。

昭和四十三年

全職員を自治会館に集合させ、常磐炭砒の経営と展望について村松部長より説明がありました。

早速質疑応答の時間になりましたので、私は一山一家の愛社精神である熱血を燃やすには、機械は油・人は和のある酒と言ったら、館内は静かになり村松部長より説明と解答がありました。ハワイアンセンターで家族慰安会を年に一回開催するとの話しに全員大喜びでした。其の他の質問もありましたが平穩のうちに終了しました。

家族慰安会は閉山迄二回続けて開催して頂きました。

昭和四十六年三月常磐炭砒閉山する

昭和四十六年六月西部炭砒創立

採炭係主任となる。

昭和四十八年五月二十九日

西部堅坑火災となり、六〇〇電車坑に退避集合して指示を待っている時、堅坑排気坑底に何か連絡伝令情報が出来てくるかも知れないと思ったら、熱田主任は急ぎ足で坑底に

行くと、連絡情報が届いてありました。見ると堅坑下火薬庫附近が火災現場であることがわかり、全員に伝達したので安心した様子でした。幸い鎮火した情報がありましたので、堅坑より無事昇坑出来ました。

残念なことに保坑係藤田主任・羽根田係員・志賀係員が担当区域の火災現場状況報告するため現場へ行き、殉職されました。（藤田主任落石、羽根田係員、志賀係員一酸化炭素中毒）

職場に於いては健康で明るく技術研鑽に励み、仲間の信頼も厚く、西部砒発展のため功績を残された事に對し忘れることが出来ません。

心より御冥福お祈り致します。

昭和四十九年六月二十六日

排気坑ベルト坑火災事故あり、相次ぐ事故でしたが、人身的な災害がなく無事鎮火出来たのは幸いでした。

昭和五十年九月

福島県庁に木村県知事を芳賀組合長と二人で訪問して、西部炭砒の現況を説明、今後の問題について陳情お願いして帰る。

昭和五十年

NHK福島放送局にいわき民謡会長坂脇先生、坂本版画

家と三人で伺いました。旅は道づれで道中美術工芸の話して遠くも感じませんでした。

常磐炭砒開山の近況と職場につながる家族の心境について、お話しに行つて来ました。

私は常磐炭砒の石炭を閉山記念に持つて行き机の上に石炭を置き、坂本先生は石炭掘進と炭車に積込む状態の版画六枚を飾りました。坂脇先生は尺八で常磐炭砒節を音色も静かに閉山を知らせる如く流し始めましたので、私は石炭を撫でながら炭坑への愛執を入れながら、地域の皆さん八十有余年の歴史ある本州随一の常磐炭砒の灯火が消える事になりました。永い間の御愛顧に對し厚く御礼を申し上げます。家庭では、お父さん今日でお仕事も終りですわねと、母と妻が愛情こめた日本一の手作り弁当を手を持ち、ご安全にと家族に見送られる姿には、永い歳月を務めぬいた勤労に對する感謝の言葉が自然にでて涙の出る想いでした。

NHK福島放送局より帰宅し、閉山により炭砒を去る人と思うと、昭和二十年の終戦が思いだされ、当時思つた事は学ぶ事、食べる事は生きる事につながるのので、常磐炭砒には希望に満ちた砒員が就職、安定所の紹介で働く喜びを以つて会社の労務係に来てました。停年退職迄お世話になりたいと毎日来ましたので、社内は活氣にあふれておりま



した。給料日にはお祭りさわぎで酒を飲み、炭砒人でなければ人に非ずと肩を切つて歩く姿も見られる時もあったが、歴史には常に経済発想のサイクルの組合せがあり、常磐炭砒もサイクルの組合せが技術的・経済的になり立たなくなつたと思われた。

昭和五十年

東京本社に芳賀組合長と二人で上京すると、中村社長、渡辺管理部長が出迎えに来られ、上京御苦勞様と声をかけられる。

社長室に案内され、中村社長に閉山問題に付いて頼むと言われ、斉藤代議士、飯野秘書の案内で、労働省に行つて来てもらいたいと言われました。

四人で労働省に伺い案内員に担任局長室に案内され、常磐炭砒閉山問題と状況に就いて説明を五分以内で纏めると、大変むづかしい事項なので別館で再度この問題について伺うと退席されました。

芳賀組合長と私は本社に戻り、中村社長に局長との五分間交渉経過を報告し、今夜の会議時間を説明すると満足な表情をして、お茶を出してくれたので飲み乍ら雑談になり、戦時中会社に出勤する時は軍刀を腰にさげて毎日出勤した事を話したら、時代の流れだと笑つておられました。

午後五時に本社を出発し別館に着くと、斎藤代議士、飯野秘書長が玄関に迎えに来て待つていました。

六時近くなると労働省の局長が出席されたので、局長全員を斎藤代議士が紹介して下さいました。芳賀組合長と私は自己紹介をする、局長となれば全員東大出身で斎藤学校卒業生とは斎藤代議士が中央という席順があり、相馬、いわき、福島県に貢献と実績があつた事が伺われました。

午後六時三十分、議題「閉山問題に付いて」沈黙が続く、発言がないので切り出すのに時間を要すると思い、私は床の間にある掛軸を見て、局長八名出席しておりますので、一人で趣味を二ツ以上持つてれば十六の趣味と思い、見たままに流石は一流の別館だとトボケタ表情をして、床の間に掛けてある掛軸は横山大観の弟子で、堅山南風先生と言つて文化勲章を授与された掛軸と褒めたら、一人の局長が鈴木さん貴方は普通の人ではないねと言われたので、私は思った釣竿の針に餌をつけ糸を水中にたらしたら魚が餌を食べたので、浮き引かれ釣り上げる状況迄局長が心を和らげたので、会議の進行が速く閉山問題処理が円満に運び終わりました。

本社に戻り中村社長に報告すると、大変褒められました。東京に一宿する様言われましたが、仕事が忙しいので夜行

列車で帰宅しました。

昭和五十一年常磐炭砒西部砒閉山



立柱

# 集い



旧西部炭硯採炭課職制会(20周年記念)

平成8年10月26日 於スバリゾートハワイアンズ



旧西部炭硯採炭課職制会

平成14年11月24日 於スバリゾートハワイアンズ

## 旧西部炭砒採炭課職制名簿

## 直系上司

平成 15 年 9 月現在

| 役 職    | 氏 名   | 住 所            | 〒        | 電 話          | 備 考            |
|--------|-------|----------------|----------|--------------|----------------|
| 社長(所長) | 岡部 元治 | いわき市内郷御厩町1-183 | 973-8402 | 0246-27-4828 | 平成12, 10, 29病死 |
| 砒長(前期) | 藤田 貢  | いわき市郷ヶ丘1-17-5  | 970-8045 | 0246-28-4427 |                |
| 砒長(後期) | 小林 眞一 | いわき市郷ヶ丘1-8-7   | 970-8045 | 0246-28-1855 |                |

## 会 員

| 氏 名   | 住 所                    | 〒        | 電 話          | 備 考 |
|-------|------------------------|----------|--------------|-----|
| 赤倉 登  | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 144-15  | 972-8322 | 0246-43-5049 |     |
| 栗崎 二男 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 120-39  | 972-8322 | 0246-43-6606 |     |
| 寒河江貞光 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 120-21  | 972-8322 | 0246-44-0236 |     |
| 高橋 亘  | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 121-34  | 972-8322 | 0246-43-2325 |     |
| 門馬 幸正 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 121-71  | 972-8322 | 0246-43-6560 |     |
| 結城 良一 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 121-39  | 972-8322 | 0246-43-2940 |     |
| 横山 信夫 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 121-37  | 972-8322 | 0246-43-2889 |     |
| 小針 重徳 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 132     | 972-8322 | 0246-43-2163 |     |
| 佐久間宏殷 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 132     | 972-8322 | 0246-43-2557 |     |
| 佐々木力男 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 132     | 972-8322 | 0246-43-7825 |     |
| 服部 勝  | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 132     | 972-8322 | 0246-43-6612 |     |
| 藤林 雄一 | いわき市常磐上湯長谷町湯台堂 132-19  | 972-8322 | 0246-44-6257 |     |
| 安斎 孝道 | いわき市常磐上湯長谷町腰巻 45-9     | 972-8322 | 0246-43-6692 |     |
| 石井 功  | いわき市常磐上湯長谷町扇田 38-1     | 972-8322 | 0246-43-4457 |     |
| 石嶋 一二 | いわき市常磐上湯長谷町釜の前 100-21  | 972-8322 | 0246-43-6631 |     |
| 村田 一二 | いわき市常磐上湯長谷町釜の前 161-132 | 972-8322 | 0246-42-4992 |     |
| 上田 伯  | いわき市常磐上湯長谷町五反田 358     | 972-8322 | 0246-43-4391 |     |
| 大楽 雅勅 | いわき市常磐上湯長谷町五反田 285     | 972-8322 | 0246-43-3016 |     |
| 土田 政一 | いわき市常磐上湯長谷町五反田 250     | 972-8322 | 0246-43-6223 |     |
| 江尻 信和 | いわき市常磐上湯長谷町上ノ台 110-52  | 972-8322 | 0246-43-2326 |     |
| 高橋 清幸 | いわき市常磐上湯長谷町長倉 6        | 972-8322 | 0246-43-7474 |     |
| 徳山 弘  | いわき市常磐上湯長谷町梅ヶ平 56      | 972-8322 | 0246-44-2249 |     |
| 阿部 敏雄 | いわき市常磐西郷町落合 135-1      | 972-8316 | 0246-43-4415 |     |
| 佐藤 正雄 | いわき市常磐西郷町金山 369-2      | 972-8316 | 0246-44-0340 |     |
| 矢吹 清昭 | いわき市常磐関船町屋津 10-39      | 972-8318 | 0246-43-4357 |     |
| 大平 忠美 | いわき市常磐湯本町天王崎 132       | 972-8321 | 0246-42-4570 |     |
| 菅野 昭八 | いわき市常磐湯本町八仙 38-12-10   | 972-8321 | 0246-44-0366 |     |

| 氏 名   | 住 所                  | 〒        | 電 話          | 備 考 |
|-------|----------------------|----------|--------------|-----|
| 星 由雄  | いわき市常磐湯本町八仙 38-11-27 | 972-8321 | 0246-43-6576 |     |
| 平 克美  | いわき市常磐湯本町天神 48-4     | 972-8321 | 0246-43-6690 |     |
| 佐伯 勇  | いわき市常磐湯本町傾城 67-67    | 972-8321 | 0246-43-5091 |     |
| 渡辺 松男 | いわき市常磐湯本町上浅貝 12-23   | 972-8321 | 0246-43-3415 |     |
| 熱田 清  | いわき市内郷内町四方北 56-12    | 973-8408 | 0246-26-7196 |     |
| 雲藤 朝男 | いわき市内郷内町前田 81        | 973-8404 | 0246-27-3336 |     |
| 高橋英三郎 | いわき市内郷内町桜本 3         | 973-8404 | 0246-26-6168 |     |
| 及川義一郎 | いわき市内郷白水町入山 10-6     | 973-8405 | 0246-26-0066 |     |
| 加藤 光紀 | いわき市内郷小島町二丁目 6-5     | 973-8401 | 0246-26-0460 |     |
| 高田 実  | いわき市内郷宮町代 38         | 973-8407 | 0246-26-1821 |     |
| 吉川 一美 | いわき市内郷宮町金坂 197-96    | 973-8407 | 0246-27-2350 |     |
| 中村 悦造 | いわき市内郷高坂町桜井 93-54    | 973-8408 | 0246-26-5323 |     |
| 佐藤 胤信 | いわき市平下平窪中島町 5-14     | 970-8004 | 0246-23-9822 |     |
| 鈴木 茂富 | いわき市郷ヶ丘 2-4-3        | 970-8045 | 0246-28-3817 |     |
| 高木 晋一 | いわき市平中山宮下 1-95       | 970-8031 | 0246-28-2314 |     |
| 園部 和夫 | いわき市平泉崎向山 146-1      | 970-0112 | 0246-34-6307 |     |
| 横田 寅男 | いわき市泉ヶ丘 1-22-1       | 971-8171 | 0246-56-2556 |     |
| 佐藤 幸衛 | いわき市好間町上好間田代 66-35   | 970-1153 | 0246-36-4620 |     |
| 永山 茂  | いわき市鹿島町米田殿作 27-47    | 971-8133 | 0246-29-5547 |     |
| 多田直次郎 | いわき市草木台 2-5-6        | 972-8301 | 0246-29-4141 |     |
| 鈴木 和夫 | 北茨城市関本町関本中 3004-7    | 319-1723 | 0293-46-0914 |     |
| 矢吹 清和 | 牛久市神谷 1-33-3         | 300-1216 | 0298-74-2047 |     |
| 吉田 順平 | 常陸太田市町屋町 1042-3      | 311-0311 | 0294-78-0428 |     |

## 物 故 者

| 氏 名   | 年 月 日               | 氏 名   | 年 月 日                |
|-------|---------------------|-------|----------------------|
| 羽田 栄一 | 殉職 昭和 48 年 5 月 29 日 | 鈴木 政美 | 病死                   |
| 志賀 栄次 | 殉職 昭和 48 年 5 月 29 日 | 黒田 貞蔵 | 病死 平成 8 年            |
| 藤田 利雄 | 殉職 昭和 48 年 5 月 29 日 | 芳賀 幸雄 | 病死 平成 8 年 11 月 1 日   |
| 栗城 正夫 | 病死                  | 白土 重雄 | 病死 平成 11 年           |
| 後藤 武志 | 病死 昭和 59 年 4 月 12 日 | 中田 孝  | 病死 平成 12 年 2 月 1 日   |
| 今野 信吉 | 病死                  | 佐々木俊悦 | 病死 平成 12 年 2 月 7 日   |
| 細谷栄太郎 | 病死                  | 佐藤 源治 | 病死 平成 13 年 4 月 28 日  |
| 木之内久信 | 病死 平成 4 年 12 月 7 日  | 舟木 正平 | 病死 平成 14 年 5 月 6 日   |
| 倉田 文雄 | 病死 平成 6 年 7 月 10 日  | 大津 春雄 | 病死 平成 14 年 10 月 6 日  |
| 石塚 政夫 | 病死                  | 大縄 昭正 | 病死 平成 14 年 11 月 16 日 |

―炭<sup>や</sup>砦<sup>ま</sup>の思い出―

発行日 平成十五年十一月三十日

発行 旧西部炭砦採炭課職制会

代表 佐久間 宏 殷

〒九七二八三三

いわき市常磐上湯長谷町湯台堂一三二

電話〇二四六一四三一二五五七

編集 結城 良一 小針 重徳

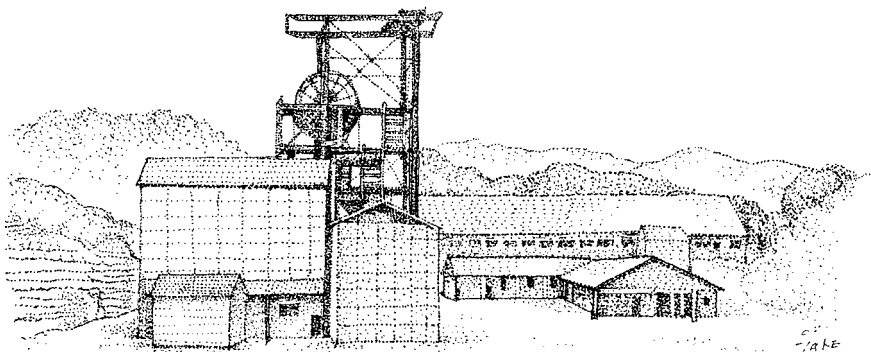
藤林 雄一 服部 勝

印刷 八幡印刷株式会社

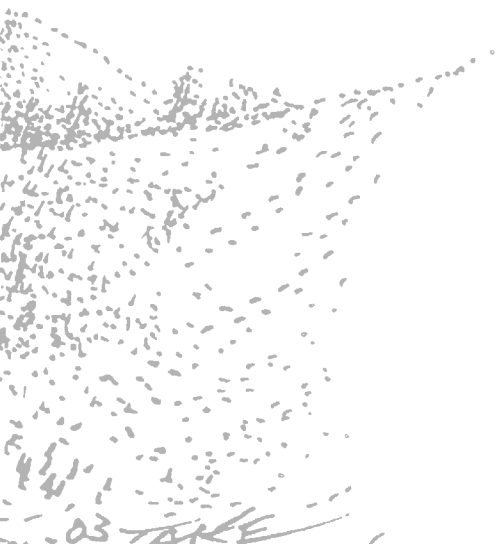
〒九七〇八〇二六

いわき市平字田町八二一―一三

電話〇二四六一三三一四七一



03  
-AKE



03 TAKE